

1. シンポジウムの概要

1) 第8回放送利用の大学公開講座シンポジウムは、放送教育開発センターと財団法人民間放送教育協会の主催で、北海道大学と北海道放送を主管機関として、平成3年2月21日(木)、22日(金)の2日間、札幌市「京王プラザホテル札幌」において、「広域教育への視点—大学放送公開講座と市町村との提携をめざして—」をメインテーマに18大学、18放送局その他の関係機関から約180名の参加を得て開催された。

開催に際して、主催機関の放送教育開発センター加藤秀俊所長並びに財団法人民間放送教育協会川村豊三郎専務理事よりあいさつが行われ、北海道大学伴義雄学長より記念講演が行われた。

2) このシンポジウムは、3つのセッションより構成され、第1セッションでは「大学放送公開講座と市町村との提携をめざして」をテーマとして、北海道大学における市町村との提携状況を北海道放送制作のビデオテープで紹介し、これからの放送公開講座を進めるうえでの市町村との提携のあり方と展望について討議を行った。

3) 第2セッションでは、「大学放送公開講座の問題点をめぐって」をテーマとして、大学・放送局・地域が放送公開講座を実施していくうえで、各地域における問題点・特色等について、7地域の大学と放送局から提案を行った。

発表大学・放送局は次のとおり。

東北大学・東北放送、新潟大学・新潟放送、信州大学・信越放送、名古屋大学・名古屋放送、広島大学・中国放送、徳島大学・四国放送、熊本大学・熊本放送

4) 第3セッションでは、調査研究のテーマ研究別に2年度までの中間報告として、各実施大学相互で共通認識ができるよう発表・討議を行った。

なお報告は各テーマの代表として4大学から報告を行った。発表大学は次のとおり。

①番組制作に関する研究—高岡短期大学、②印刷教材に関する研究—大阪大学、③受講生サービスと受講生拡大に関する研究—金沢大学、④大学授業への活用に関する研究—琉球大学。

※ここではシンポジウムの実施報告として、シンポジウム当日の議事録を収録するものである。

開 会 式

○総合司会（北海道放送・船越ゆかりアナウンサー）

ただいまから第8回放送利用の大学公開講座シンポジウムを開会いたします。

本日は、全国各地からたくさんの皆様お集まりいただきまして、ありがとうございます。

札幌は、新しい雪と寒さで皆さんを歓迎しております。きのうが、この冬の最低気温を記録いたしまして、氷点下16度でございました。けさは氷点下7.2度ということで、きのうよりは少し寒さは緩んでおりますが、まだまだ春は遠い北海道でございます。

私は、総合司会を務めさせていただきます北海道放送の船越ゆかりでございます。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、開会に当たりまして、当シンポジウムの主催者側からごあいさつがございまして。

初めに、放送教育開発センター、加藤秀俊所長お願いいたします。

あ い さ つ

○加藤秀俊（放送教育開発センター所長）

ご紹介いただきました加藤でございます。

もうこれで何年目になりますか、私にとりましては3回目ということになりましょうか、こうやってお顔ぶれ拝見いたしますと、もうほとんど名刺交換の必要のないような先生方が半分以上いらっしゃる、大変楽しいといえますか、我々の仲間意識というのが、だんだん出てきたような感じがいたします。

いずれにしても、今、司会の方からお話ございましたけれども、北海道にとっては、これがノーマルなんでしょうけれども、先ほども飛行機で少し延着するというような連絡の入った大学もございまして、年度末のお忙しい中、全国各地からお運びいただきまして、ありがとうございました。

申し上げるまでもございませぬけれども、この会の開催に当たりましては、北海道大学、北海道放送に主管機関として絶大なご尽力をいただきまして、こんな立派な会場も設定していただきました。それからまた、昨年大阪大学の熊谷先生にお願いしたのが第1回でございましてけれども、今回も北海道大学の伴学長に記念講演をいただくことになっております。お忙しい中、時間をお割きいただきましたことを、まず心からお礼申し上げます。

皆様のお手元の資料の中に多分入っていると思いますけれども、私どもの開発センターで昨年から発行いたしましたNAKADACHIという広報紙が入っているかと存じます。これに伴先生にご登場いただいております。

さて、この放送利用の大学公開講座でございましてけれども、昨年ですか、文部省が発表した数字を見てみますと、現在公開講座を実施している大学、短大は、全国で300を超えているようでございます。それから受講生の数が、大体40万人近くという数字も挙げられております。その中には当然、この放送利用による大学公開講座も入っているわけでございましてけれども、そうした全体の文脈の中で考えてみますと、通常の大学開放と、それからこうした放送

利用のそれとの間に、一つの連携がこれからとられていかなければならないでしょうし、さらに同時に放送利用ということの意味づけというの、いよいよはっきりしていけないといけない時期に差しかかっているかと思います。

そうしたことは、この放送利用の大学公開講座が、その存在意味をもう一度問い直されているということも意味するものかと私は考えております。とりわけ、この2月の初めに大学審議会がお出しになりました答申の中に、大学の思い切った自由化をというご提案がございまして、こうした放送利用の公開講座が、例えばの話でございませけれども、大学の単位として学内、学外ともに認められるようなことも将来的には可能でございませうし、そうした実験にもこれから挑んでいく必要があるかもしれません。

それから、そのことは大学自体の、国立大学の場合、とりわけ難しうございませけれども、アメリカ、オーストラリアなどで行われているようなオンキャンパスの学生とオフキャンパスの学生といったような、オフキャンパスの学生をこれから生涯学習の問題とも重ね合いながら考えていなければいけないということの意味するのかもしれない。

そうした意味で、この大学公開講座、放送利用の公開講座でございませますが、非常にたくさんの先生方のご努力によりまして、これで13年目を迎えるわけでございますけれども、それだけに私どもが今問われている問題というのはかなり大きいように思います。

今申し上げましたような公開講座の中で、どのように位置づけていくかということもございませし、通常の大学の公開でございませると、教室を開放するというだけのことでございませますが、放送利用の場合には、相当コストもかかってまいります。すると、そのコストパフォーマンスをどうとらえていくのかといったようなことも問題になりませう。

そういう点で来年度でございませけれども、高岡短期大学の方では、聴講者から受講料を徴収するという新しい試みもお始めいただくことになってございませし、それから同時に、これは2年前から申し上げていることでございませけれども、単独大学だけではなしに、大学相互間が乗り入れての共同制作とか、共同研究とかいった領域にもこれから力を入れてなければならぬと考えてございませ。

この8回のプログラムをずっと振り返って読んでみたのでございませけれども、第6回ぐらいまでは大体、各大学の授業実施報告のようなことで動いてございませけれども、一昨年あたりから、大学別というよりはむしろ問題別のご発表をいただくというふうに変わりしてございませ、どちらかという、学会にやや似た形式になってきたかなと思ひませ。これもひとえに先生方のお力添えによるものでございませけれども、こうしたさまざまご努力、これから明日まで、わずかな時間でございませけれども、意見を十分に交換させてございませ、私どもも勉強させてございませたいと思ひませ。

今回、北海道でこうして開かれませたことの意味でございませけれども、先ほど申し上げませた大学群という言葉とは直接にはなじみませけれども、この北海道の持つ広域性、それからさらに、北海道の各地方公共団体と、それから大学開放講座との接点といったようなことを勘案いたしましませ、広域教育への視点というふうに変りませ。

昨日、少し遅くなりましたけれども、北大に伴学長をお訪ねして、ごあいさつに伺ひませたときに伺ひませたのでございませけれども、北海道大学が持つられる演習林、方々にあるよう

でございますけれども、その中でたまたま、きのうお話に出ましたのは、その面積が大体東京都の23区内でございますが、そのぐらいに匹敵するぐらいの演習林がある。さすが北海道は広いなという感じを改めて持ったわけでございますけれども、そうした点をも含めまして、第1セッション、つまりきょうの午後でございますが、北海道大学と北海道放送の企画によりまして、市町村との提携の模様、これをご報告いただきます。

明日は、「大学放送公開講座の問題点をめぐって」ということで、7つの大学からそれぞれに問題を提起していただきます。これは大学ごとではありますけれども、同時にというよりは、それよりもより問題中心主義といった方がよろしいかと存じます。

第3セッションは、「放送公開講座研究報告」といたしまして、今進められております4つの研究についてのご報告をいただくという予定をしております。

皆様のご協力のもとに、きょう、明日と実り多いシンポジウムでありますように、主催者として皆様をご歓迎申し上げるとともに、切にこの結果と申しますか、この2日間がお互いの相互啓発になりますように祈りまして、ごあいさつとさせていただきます。

なお、元年度の公開講座の研究が、センターの研究報告としまして、ちょっとブルーの線の入りました報告書が1冊資料として入っていると思っておりますので、ご参照いただきたいと思います。

以上をもってごあいさつにさせていただきます。どうもありがとうございました。

——— 拍手 ———

○総合司会

続きまして、財団法人民間放送教育協会、川村豊三郎専務理事、お願いいたします。

○川村豊三郎（財団法人民間放送教育協会専務理事）

ご紹介いただきました川村でございます。

本日はご多忙のところ、全国各地からお運びいただきまして、本当にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

また、北海道大学、北海道放送の皆様のご努力によりまして、このような立派な会場で開催されますことは、まことに喜ばしいことで、ご同慶の至りでございます。

私ども民教協は、放送利用によるこの大学公開講座が開催されて以来、お手伝いさせていただいておりますが、各大学の先生方のお力によりまして、各地域におきましても、非常に制作、放送を通じて、できるだけ地域に密着した講座になるよう努力してまいっております。

本年度から四国地区のラジオによる講座が開催されることになっております。また東北大学、新潟大学及び広島大学におきましては、45分間の番組が30分番組になっております。来年度からは、名古屋大学もこの30分番組ということになっておりますが、これらにつきましては、明日の第2セッションにおきまして、この30分番組の問題点、その他公開講座に対するいろいろなご意見、ご提言等をいただき、ご検討、ご討議いただければ幸いです。

この公開講座もおかげさまで、徐々にではございますが、各地域で実績を上げてまいっております。これもひとえに放送教育センターの皆様始め、各放送局、大学の皆様のご努力のおかげであると感謝を申し上げておる次第でございます。

きょうと明日の2日間ではございますが、このシンポジウムが、ひとつ皆様方の熱心なご討

議によりまして、大いなる成果を上げられますことを心から期待しておりますのでございます。

最後になりましたが、本日ご参加いただきました皆様初め、主管を今回お願いいたしました北海道大学、北海道放送のご関係の皆様、また加藤所長初め開発センターの皆様方に心から御礼申し上げまして、簡単ではございますが、ごあいさつにかえさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

——— 拍 手 ———

○総合司会

では続きまして、記念講演でございます。

今回のシンポジウムの主管機関であります北海道大学学長、伴義雄先生に、薬の進歩という演題でお話しさせていただきます。

伴先生、お願いいたします。